

楊洲周延「踏舞会 上野桜花観遊／図」(部分)

平成29年度 鹿児島大学附属図書館貴重書公開

女性たちの 明治維新

鹿児島大学附属図書館

館長あいさつ

来年は明治維新150年の節目の年で、今春、大河ドラマ「西郷どん」の放映が発表されてからは、西郷隆盛翁に対する熱が一段と高くなったように感じます。鹿児島県人にとって、「西郷どん」は永遠に尊敬され、愛される人だと再認識したところです。しかしながら、いつの世においても偉人一人ではどんな偉業も成し遂げられないのが事実で、偉人の周囲には、協働した人、支持した人、そして見守った人がいます。この周囲の人々も多くの偉業を成し遂げているのも事実です。

幕末・維新时期においても西郷さん、大久保さん同様に、多くの人々が活躍していました。従来、明治維新を解き明かすときそのほとんどは男性中心でしたが、19回目の開催となる本企画では、女性たちの活動にスポットを当て、維新以前に彼女たちがどのような役割を果たし、維新を成し遂げた結果その役割がどのように変わったか、またこれらの活動が彼女たちの家族関係にどのように影響したか、そしてその心情はいかなるものであったかを、多くの資料をもとに解き明かしています。これらの資料は、来館された皆様の知的好奇心を強く刺激するとともに、女性の力強さと粘り強さを教えてくれるものと思います。

最後になりましたが、今回の企画展開催に当たりご協力を賜りました皆様に心より御礼申し上げます。

平成29年11月 鹿児島大学附属図書館長 鈴木廣志

凡例

- 一、本図録は、平成29年度鹿児島大学附属図書館貴重書公開「女性たちの明治維新」展の展覧図録である。
- 二、今回の貴重書公開は、鹿児島大学附属図書館が所蔵する貴重書のほか、鹿児島県歴史資料センター黎明館、尚古集成館、鹿児島県立図書館、始良市加治木郷土館、種子島開発総合センター鉄砲館、中種子町立歴史民俗資料館、熊野神社、真田宝物館、長野稔子氏、丹羽謙治氏所蔵の現品ないしその写真を展示し、幕末から明治初頭にかけての時期における女性たちの諸相を示すようにした。
- 三、今回の貴重書公開は、平成28・29年度鹿児島大学学長裁量経費「明治維新150周年記念事業プロジェクト」による成果の一部である。
- 四、本図録の解説およびコラムにおいては、明治5年以前の出来事は旧暦で、明治6年以降の出来事は新暦（グレゴリオ暦）で、それぞれ表記した。

謝辞

展示の準備にあたっては、上記の各機関の職員諸氏に格段のご配慮を賜り、また、村川元子氏、奥村学氏、鮫嶋安豊氏、石堂和博氏には特にお世話になった。ここに記して謝意を表する。

目次

館長あいさつ / 凡例 / 謝辞

目次..... 1

第Ⅰ部 政治

解説..... 2

松寿院肖像 / 松寿院の花瓶..... 3

松寿院の筆架 / 阿世知国良「西之表名勝貼り交ぜ図巻」..... 4

コラム「松寿院にみる女当主の役割」..... 5

税所敦子筆 歌幅 / 宮城御移転記..... 7

コラム「税所敦子の生涯」..... 8

若江薫子『和解女四書』 / 錦絵「鹿児島勇婦揃」..... 10

近衛敬子（篤姫）書状 / 大山捨松写真..... 11

コラム「小説で読む幕末明治の女性たち」..... 12

第Ⅱ部 家族

解説..... 13

島津斉宣肖像と歯..... 14

修斉訓 / 森有礼「妻妾論」..... 16

江夏八重写真 / 江夏八重 詠草 写本..... 17

コラム「江夏家の人々」..... 18

有村れん書状..... 19

コラム「幕末・維新期に活躍した夫と妻たち」..... 20

第Ⅲ部 表現

解説..... 22

津崎矩子（村岡局）短冊 / 税所敦子筆 書幅..... 23

中島歌子短冊 / 三輪田真佐子短冊..... 24

コラム「薩摩の女性と書」..... 25

押川栄 謝辞・作文二題 / 光蘭院「道乃記」..... 26

鹿児島言葉わらひの種..... 27

コラム「島津輯子とことば・絵」..... 28

三幅対の神像..... 29

第1部 政治

かつての研究においては、江戸時代の女性は『家』に隷属し支配される存在』として捉えられる傾向にあったが、近年では、そうした概念にはおさまりきらない近世女性の姿が多数紹介されている。例えば、表と奥に分けられた江戸時代の武家において、当主の正妻は、奥向きだけでなく、表の政治的領域にも様々なかたちで関与していた（柳谷慶子「武家権力と女性」、『〈江戸〉の人と身分4 身分のなかの女性』吉川弘文館、2010年）。その実績は、表の政治が危機的状況を迎えたときに、事態打開のために前当主の妻が政治的言動を発する下地ともなった。天璋院篤姫や松寿院（松樹院）隣姫も、そうした妻の権限を行使して幕末の困難に対処し、婚家を明治の華族へとつなげたといえる。

奥には、その運営を支える奥女中たちがいた。大名家における奥女中の構成のもっとも単純な基本形は年寄・側・末の三階層であるが、上臈を最高位におく構成をとる大名家もあった（福田千鶴「奥女中の世界」、前掲『身分のなかの女性』）。奥女中のなかには、当主の側室となる者もあれば、表の役人と渡り合う権力をもつ者もあった。奥女中の階梯を上っていくうえで、彼女たちの容姿や才覚、身につけた学問・教養が大きな武器となったことは想像に難くない。武家の奥女中ではないが、文久3年（1863）近衛忠房に嫁いだ貞姫（島津久光及び斉彬養女）のお付きとして近衛家に仕えることになった税所敦子は、薩摩にいたときからその和歌の才によって藩士たちにも知られた人物であった。そして、天璋院付きの幾島や近衛家老女の津崎矩子（第Ⅲ部参照）のように、幕末の政局に関わる動きをした奥女中たちもいた。

明治維新を経て、女性と政治との関わりかたも変化していった。近代国家となった日本は、やがて女性を政治の領域から排除する方向へと向かうが、その一方で新しい女性たちが登場してくる。例えば、大山捨松（山川咲子）は、会津藩重臣の末娘として生まれ、9歳のときに会津戦争の修羅場を経験し、12歳で津田梅子らとともに日本初の女子留学生としてアメリカに渡った。帰国後、彼女は政府高官である大山巖との結婚によってその才や学識を活かす場を得た。妻となることでようやく社会への影響力を持つことができた捨松の生き方は、江戸時代の武家の妻の延長線上に位置づけることもできるが、その結婚が父兄によって決められたものではなく（当初、兄の山川浩は、会津の宿敵ともいえる薩摩出身の大山から妹捨松への縁談を断ったという）、捨松自身が巖とデートを重ねた上で決意した結婚であったところに、「家」ではなく個人としての意志に基づいて行動する女性の姿をみることができる。（金井）



天璋院篤姫写真（尚古集成館所蔵）



しょうじゅいんしょうぞう

松寿院肖像

熊野神社所蔵

中種子町立歴史民俗資料館寄託

江戸末期事実上の当主として種子島氏の家政を担当した松寿院の肖像である。松寿院の肖像は、鹿児島県熊毛郡中種子町熊野に鎮座する熊野神社に所蔵され鹿児島県熊毛郡中種子町歴史民俗資料館に寄託されているものと、種子島開発総合センター鉄砲館に所蔵されているものの計二つある。本項に掲載されているのは熊野神社所蔵のものである。熊野神社は、『さんごくめいしょうずえ三国名勝図会』には紀州熊野神社を信仰した種子島氏十代当主はたとき幡時が熊野神社を勧請して成立したと記載されている。松寿院は熊野神社を信仰し、天保9年(1838)熊野神社内に一寺を建立し松濤庵しょうとうあんと名付け、熊野権現の神像を掛軸にして熊野神社に寄進奉納した。松寿院と熊野神社との以上の関係に基いて、種子島氏はこの松寿院肖像を熊野神社に寄進したと考えられる。(日隈)



しょうじゅいん かびん 松寿院の花瓶

個人蔵

本花瓶には、「秋玉院様、春窓院様、蓮玉様、智月様エ、松寿院様ヨリ」と刻まれている。「秋玉院様」は松寿院の長女歌うた袈裟、「春窓院様」は次女いわけさ巖袈裟、「蓮玉様」は長男鐵熊、「智月様」は次男知千代の法名である。松寿院は種子島久道に嫁し、二男四女を儲けた。この中で三女久美は島津又六郎久徴、四女婦美は鎌田木工かまたもくのじょう之允に嫁したが、花瓶に法名が刻まれている長女、次女、長男、次男は、何れも早世した。この花瓶は、松寿院から早世した子供達に供えられたと考えられる。以上のことを踏まえると本花瓶は、松寿院が自分の早世した子供達を弔う為に造らせたものであると考えられる。長男、次男が何れも早世した結果、松寿院は実家から養子を迎えることになる。(日隈)





しょうじゅいん ひっか 松寿院の筆架

種子島開発総合センター鉄砲館所蔵

本筆架は、茶色系彩色であり、島津氏の家紋が金色で散らされている。松寿院が愛用した筆架であると考えられる。松寿院は、薩摩藩主島津斉宣次女で名は隣（ちか又はむら）。種子島久道に嫁し、久道が死去した文政12年（1829）から松寿院の異母弟久珍が種子島氏の家督を継承した天保13年（1842）迄の間と、養子として迎えた久珍が死去した嘉永7年（1854）から松寿院が亡くなる慶応元年（1865）迄の間、松寿院は種子島氏の事実上の当主として家政を担当した。松寿院は、種子島氏の家政を担当していた時期を中心に本筆架を使用していたと考えられる。（日隈）



あぜちこくりょう にしのおもてめいしょうは ま ずかん 阿世知国良「西之表名勝貼り交ぜ図巻」

個人蔵

1巻、22.7糎×244糎。本巻は、阿世知国良が種子島西之表の名勝の絵や松寿院と山田歌子にまつわるエピソードや詠歌を記した紙を貼り合わせ一巻にまとめたものである。昭和13年（1938）成。絵や和歌は、京都南禅寺の松浦総長が桂庵禅師の修墓のために鹿児島を訪れた際、同行した福西忠次郎が種子島の松寿院および山田歌子の墓に詣でた記念として福西に贈呈されたもの。巻頭より5枚の絵——「種子島西之表旧島主」の松寿院の墓、種子島時堯の墓、西の表築港、刀鍛冶矢板金兵衛の娘若狭の墓、山田歌子の墓——があり、続いて山田歌子と松寿院のエピソード、阿世知と旧制鹿児島第一中学校の教諭を務めた樋渡清廉（海門）の和歌を2首ずつ収録する。

阿世知は明治末から昭和にかけて活躍した鹿児島新聞の記者で、旧名は金千代、大正中期から号の国良を用いる。大正12年（1923）から種子島（西之表）支局に勤務していた。編著に『熊毛郡宗教史資料』『栖林種子島久基公略伝』がある。（丹羽）



松寿院にみる女当主の役割

松寿院は、寛政9年(1797)薩摩藩主^{しまづなりのおぶ}島津斉宣次女(母は島津久建女)として誕生し、^{ちか}隣(本稿では以下隣で統一する)と名付けられた。斉宣は、生後3カ月の隣と種子島久柄(後に久照と改名)の長子^{つるけさ}鶴袈裟(後の久道^{ひさみち}、当時5歳(以下本稿では年齢は数え年で記載する))とを婚約させた。隣が婚約させられた種子島氏は、鎌倉期に種子島を含む島津荘大隅方(大隅国内に分布していた島津荘)地頭職に任命された鎌倉北条氏の一族である名越氏の家臣肥後氏の子孫である。肥後氏は、島津荘大隅方の地頭代を勤めた。戦国後期種子島氏は戦国大名島津氏に服属し、種子島氏はその後島津氏と婚姻関係を結び、薩摩藩において家老職を勤め、18世紀後期に島津一門家4家に次ぐ家格を認められていた。

文化8年(1811)隣は、15歳で19歳の種子島久道と結婚した。久道は、文化11年(1814)種子島氏の当主の座についた。文化15年(1818)薩摩藩主^{なりおき}島津斉興は、自分の子^{かねのしん}普之進(後の久光)を隣と久道との間に前年生まれた次女^{いわけさ}巖袈裟の婿として種子島氏の当主の座を継承させるように命じた。この時隣は22歳で実子誕生の可能性も大きかった。しかし久道と隣は、斉興の命に従わざるを得なかった。隣は久道との間に、長女^{うたけさ}歌袈裟、次女^{いわけさ}巖袈裟、長男鐵熊、次男知千代、三女久美、四女婦美の二男四女を儲けた。しかし長女、次女、長男、次男は早世した。文政8年(1825)斉興は、普之進が^{しげとみ}重富島津家の養子になることが決まったため、普之進の種子島氏への入婿の件を一方向的に破棄した。

文政12年(1829)5月久道は死去し、隣は33歳で未亡人となった。前述のように隣の息子達は早世し、久道には一族の養子となった弟、病弱な叔父、別家を立てることを認められた叔父等がいた。種子島氏当主の座に据える相応しい人物を決定することが難しい中、隣は薩摩藩に種子島氏の家政を執ることを願い出た。藩は、隣の願いを認め、隣は、文政12年(1829)から天保13年(1842)迄の間種子島氏の家政を担当した。薩摩藩が隣の願いを認めたのは、隣が前当主久道の後家であり、藩主斉興の妹でもあり、隣を種子島氏の事実上の当主の座に据えることにより種子島氏に対する藩の影響力強化を意図していたと考えられる。隣が種子島氏の家政を取っていた間隣の補佐を強化する為に、種子島氏の家老達は一人ずつ輪番制で鹿児島に赴き、隣と、鹿児島の種子島氏邸宅に詰めている家老を支えた。

天保13年(1842)隣の異母弟^{ひさみつ}久珍が種子島氏家督を継承し、隣は種子島氏家政担当から退く。嘉永7年(1854)正月久珍は死去し、子息^{ひさたか}久尚は生まれた直後であった。隣は、久尚を補佐しながら種子島氏の家政を担当した。この時期隣は、事実上の種子島氏当主として様々な政策を行った。

隣は、種子島南部を流れる大浦川河口域の大浦浜に塩田を作することを考えた。このために大浦川河口の治水が必要となった。隣は、大浦川の川幅を拡大すると共に、田への潮入を防ぐために土堤を築くこと、川の流れを直行にする川直しを計画し、安政4年(1857)工事を行った。この工事が大浦川の川直しである。この結果新土堤は、潮入防止の役割を果たすと共に堤の上は道路として利用された。

また^{くきなが}茎永村、平山村には美田が出現し種子島の米倉となった。また塩田についても築堤工事に取り掛かったり、塩田拡張や製塩技術改良を目指し、良好な製塩を行っている地域に家臣を派遣して学ばせたり、製塩技術者を種子島に招いたりした。この結果文久元年（1861）平山大浦塩田において良好な製塩が行われるようになり、種子島における必要な塩が自給されるのみではなく、屋久島にも塩を輸出するようになった。隣が開発させた平山大浦塩田は、近代に継承されていった。

隣は、西之表港（赤尾木港）の波止^{はと}を修築した。種子島は隆起海岸が多く単調で屈曲が少なく暗礁もあり、季節風が強いので、天然の良港湾に恵まれず、昔から船の難破が夥しく財貨の損失も莫大であった。また当時琉球王国や奄美大島等と往復する落船も増加し、不慮の天候異変時の避難港も必要とされていた。隣は早くから西之表港の波止修築を考えていたが、財政事情が許さなかった。隣は西之表港波止修築を決意し、薩摩藩に願い出た。安政6年（1859）8月薩摩藩は奉行達を種子島に派遣し、前ノ浜や港口の潮の動きや港湾の広さ、水深や地形等を調査した。翌万延元年（1860）2月藩は隣の願いを許可し、年三百両を4年間援助することを決めた。種子島内各浦船主船子^{ふねうし}を総動員したり、島民の協力を得て西之表港波止修築工事が開始され、文久2年（1862）7月工事は完成した。西之表港の改修工事はこの後近代にも継承されていくが、その基礎となっているのは隣の西之表港波止修築工事であった。

この他、隣は、先人への顕彰、勧農、飢饉対策、教育に尽力し郷学を創設する等の事業を行った。事実上の種子島氏の女性当主であった隣は、慶応元年（1865）年8月20日69歳で亡くなった。（日隈）



西之表港（赤尾木港）の岸岐^{がんど}
（阿世知国良「西之表名勝貼り交ぜ図巻」より）



さいしよあつこひつ か ふ く 税所敦子筆 歌幅

鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵

まつかたまさよし
松方正義（1835-1924）が「いとわかく
おはせしころ」、竹とその根元に生える竹
の子が描かれた画を税所敦子のもとに持
参し、それに合わせた和歌を詠んでくれ
るよう頼んだ。そこで敦子は、「ふしつよ
み みさをたがはぬ 竹の子は 雲をし
のぐも 時のまにして」という一首を書
き与えた。その画が火災で失われたのち、
正義は再度の揮毫を敦子に依頼し、それ
に応じて敦子を書いたのが本歌幅の書で
ある。

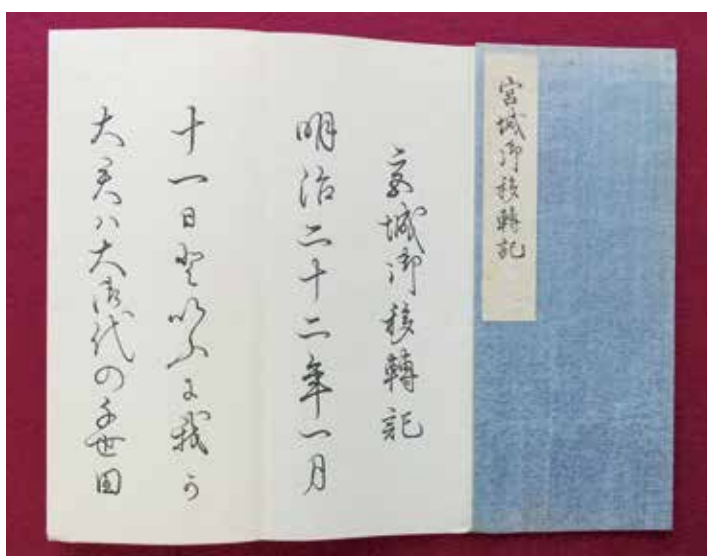
敦子が娘徳子（とくこ）を連れて、京都から亡き夫税所篤之（あつゆき）の故郷鹿児島に下向したのは嘉永6年（1853）、松方正義が19歳のときのことである。それ以前に正義が京都での役職を務めた形跡はないことから、正義が敦子に題詠を依頼したのは、敦子が鹿児島に来てから数年の間のことと思われる。（金井）

きゅうじょう ご い て ん き 宮城御移転記

鹿児島大学附属図書館所蔵

明治22年（1889）1月、明治天皇は皇后
いちじょうはるこ
一条美子（のち昭憲皇太后）とともに、赤
坂の仮宮から、造営の成った千代田の皇居に
遷幸した。本史料は、この宮城移転の日の様
子を、権掌侍であった税所敦子が記録したも
のである。このなかには、新皇居内で渡殿（わたどの）の
ほとりにいた敦子（当時65歳）に明治天皇
が「老人は寒からぬところこそよかめれ」と
声をかけて労っている記述があり、明治8年
（1875）以来宮中に仕えてきた敦子に寄せる
天皇の親しみが窺われる。

「宮城御移転記」は、明治30年（1897）4
月、松井総兵衛を印刷兼発行者として刊行された。時に敦子は73歳。今回展示する本学所蔵本は、奥付がなく、代わりに「周宮御殿」（周宮は明治天皇皇女の房子内親王（かねのみや ふさこ））の印記があることから、税所敦子の関係者に配られた本の一冊であったと見られる。（金井）



税所敦子の生涯

戦前から現在に至るまで、税所敦子^{さいしょあつこ}について一般的によく知られているのは「夫亡きあとと氣難しい^{しゅうとめ} 姑
によく仕えた」という点である。一方、研究対象としての敦子は、主に女流歌人としての側面が評価さ
れている。しかし、前近代と近代という2つの世界を生きた敦子の人生はそのまま、明治維新が女性た
ちにとってはいかなる意味を持つものであったのかを考察するための、貴重な一事例ともなり得る。

敦子の生涯を、その暮らした土地によって4期に区分しつつ概観すると、次のようになる（本コラム
末の〔参考文献〕所載の先行研究参照）。

【第1次京都時代】

敦子は、文政8年（1825）、京都鴨川の東、錦織^{にしづり}の里（現京都市左京区岡崎）で誕生した。幼少の
頃より和歌を詠んでいたという。天保13年（1842）に父の林篤国^{はやしあつくに}が死去し、その2年後の弘化元年
（1844）敦子は、薩摩藩士の税所篤之^{あつゆき}と結婚した。篤之と敦子のあいだには嘉永2年（1849）娘の徳子^{とくこ}
が生まれるが、嘉永5年（1852）篤之は病で亡くなった。嘉永6年（1853）4月下旬、29歳の敦子は娘
を連れ、鹿児島^{さつご}の婚家に向けて京都を出発する。その道中を記した敦子の日記が『心つくし』である。

【薩摩時代】

鹿児島にきた敦子は、姑や、夫の前妻の2児を含む大家族で暮らしていたが、安政4年（1857）藩
主島津斉彬^{しまづなりあきら}の子哲丸^{てつまる}が誕生し、敦子はその御守役^{おもりやく}として召し出された。しかし、安政5年（1858）に
斉彬は亡くなり、その翌年には哲丸も夭折した。その後、加治木島津家の貞姫^{さだひめ}が島津久光^{ひさみつ}養女且つ斉彬
養女となり、近衛忠房^{このえただふさ}に嫁ぐことになると、敦子はその貞姫付きの老女に選ばれた。文久3年（1863）
11月、嫁ぐ貞姫に付き従って敦子は上京の途につく。時に敦子39歳。このときの敦子の道中日記が『松
のさかえ』である。

【第2次京都時代】

京都の近衛家では、敦子は老女千代瀬^{ちよせ}として仕えた。慶応2年（1866）近衛忠房が従二位に除せら
れた折には、その拝賀のための参内の様子を敦子が「御拝賀の記」という文章にまとめている。慶応4
年（1868）7月に江戸は東京と改称され、同年9月、年号は明治と改められた。貞姫は明治6年（1873）
に東京へ居を移し、彼女に従って49歳の敦子も東京の近衛邸に移った。

【東京時代】

東京で引き続き貞姫に仕えていた敦子であったが、明治8年（1875）、権掌侍^{ごんしょうじ}に任じられ宮中に仕え
ることになる。女官としては楓内侍^{かえでのないし}と称された。皇后一条美子の和歌の相手として召し出された敦子で
あったが、実際には明治天皇の和歌を浄書することも敦子の役割となった。また、二十六年にも及んだ
権掌侍としての勤めの間には、今回の貴重書公開展にて展示した『宮城御移転記』のほか『大婚二十五
年盛典記』など、天皇・皇后が臨む儀式・行事の様子を記録する文章が、敦子の手により著された。敦

子自身の歌集『御垣の^{みかき}下^{したくさ}草』も明治21年（1888）に刊行されている。明治33年（1900）2月4日、敦子は76歳でその生涯を閉じた。

以上、きわめて簡略にはあるが、税所敦子の生涯をたどった。彼女は、和歌を詠み流麗な文章を書く作家・文学者としての能力を横糸に、そして主君に仕える臣下としての立場を縦糸にして、幕末から明治期への変革のなか自身の名声を作り上げていったといえよう。敦子が活躍するためには、この「仕える」立場であることが重要であったと考えられるが、やがて明治の世には、専門職としての作家の地位を獲得した女性たちが登場することになる。（金井）

【参考文献】

屋代熊太郎編『税所敦子刀自』（六盟館、1916年）

『明治文学全集81 明治女流文学集（一）』（筑摩書房、1966年）

寺尾美保「税所敦子小考—島津家との関わり—」（『尚古集成館紀要』5号、1991年）

『日本女性人名辞典〔普及版〕』（日本図書センター、1998年）

長福香菜「御歌所派歌人税所敦子—官歴の考証—」（『国文学攷』210号、2011年）

「歌人税所敦子の形成」（『国文学攷』212号、2011年）

「宮中出仕後の税所敦子—明治天皇・昭憲皇太后との関連に着目して—」（『明治聖徳記念学会紀要』50号、2013年）

長志珠絵「近代文化とジェンダー・バイアス」（久留島典子・長野ひろ子・長志珠絵編『歴史を読み替える ジェンダーから見た日本史』、大月書店、2015年）



税所敦子写真（『続当世活人画』、春陽堂、1899年）



わかえにおこ わげおんなししよ 若江薫子『和解女四書』

鹿児島大学附属図書館所蔵

明治16年(1883)に出版された女性道德書。後漢・班昭「女誡」、唐・宋若莘「女論語」、唐・鄭氏「女孝経」、明・徐皇后「内訓」に日本語訳をつけたもの。作者の若江薫子(1835-1881)は、菅原氏の末裔で、京都の下層公家の娘、号は秋蘭。漢学を学び攘夷論者となる。幕末に一条美子(のち明治天皇の皇后)の家庭教師をしたことから、維新後、宮中に入入りし歌道師範となるも、時代に逆らい、西洋化に反対し、政府参与であった横井小楠の暗殺者の助命嘆願をしたことで、明治2年(1869)宮中を逐われた。その後、反政府の嫌疑で自宅に三年蟄居させられた後、門弟を頼りに岡山、香川を転々とし、丸亀で没した。(高津)



かごしまゆうふうぞらい 錦絵「鹿児島勇婦揃」

鹿児島大学附属図書館所蔵

明治10年(1877)8月23日御届、絵師は楊洲周延。

「鹿児島勇婦揃」は、西南戦争で人気のある薩摩方の人物の妻子12人を描いた様式的美人画で、リアルな人物画ではない。篠原国幹、村田新八、永山弥一郎、桐野利秋、池上四郎、別府晋介は薩軍の大隊長である。大西庄之助編『鹿児島美勇伝』には、西南の役の貞女として、「桐野の娘花子」が取りあげられており「西郷隆盛の一子菊次郎国隆の結名付にして、容顔美麗、傾国の粧ひあり。且心猛く武術に長ず。今年十七才の春、親夫とも戦場へ赴きし跡、伊集院の伯母と同意して鹿児島に在る官員の宅を破毀し、猶戦場へいたり、女隊に加はり、屢々官軍に抗したり」という。(高津)





この え す み こ あ つ ひ め し ょ じ ょ う 近衛敬子（篤姫）書状

尚古集成館所蔵

包紙に「安政四年正月四日初而御台様より下され候御書」とある。

天保6年（1835）島津忠剛（今泉島津家第10代当主）の娘に生まれた一子（於一）は、嘉永6年（1853）薩摩藩主島津斉彬の養女となり篤姫と改名する。その篤姫と江戸幕府第13代将軍徳川家定の婚儀が安政3年（1856）12月に執り行われ、篤姫は御台所（将軍の正妻）となった。本書状は、彼女が江戸城で初めて迎えた正月に、斉彬に送った年賀状である。篤姫は広大院茂姫（島津重豪の娘、第11代



将軍徳川家斉の正妻）の先例に則り近衛家の養女として入興しており、差出書の「敬子」とは、近衛忠熙の娘となった篤姫が賜った諱である。新春を言祝ぐ本書状の文面からは直接窺い知ることはできないが、篤姫は入興前すでに斉彬から、子のいない家定の継嗣問題に関して話を聞いていたという。（金井）

お お や ま す て ま つ し ゃ し ん 大山捨松写真

『続当世活人画』、春陽堂、明治32年（1899）
鹿児島大学附属図書館所蔵

大山捨松（1860-1919）は、会津藩の国家老山川重固の娘。明治政府の官費留学生として11歳で渡米、ニューヨーク州ヴァッサー大学を卒業、明治15年（1882）帰国するが、完全にアメリカナイズされた捨松に活躍の場はなかった。その後、薩摩出身で先妻を亡くした参議陸軍卿・大山巖から求婚される。大山はスイスに留学し、英仏語に堪能な「西洋かぶれ」で、捨松に一目惚れし、二人は明治16年（1883）に結婚する。政府高官夫人として外交センスに優れた捨松はやがて「鹿鳴館の花」と呼ばれる。表立って活躍することはできなかったが、留学生仲間津田梅子の女子英学塾（現在の津田塾大学）を後援し女子教育にも力を尽くした。（高津）



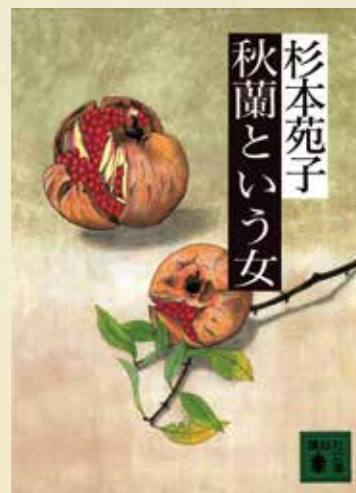
小説で読む幕末明治の女性たち

歴史上の人物を扱った本には、事実を記述するものと、そうではないものがある。小説は後者であるが、ある程度事実即して、作家の自由な想像力が駆使される。研究者の手による歴史物は、事実は教えてくれるが、無味乾燥で臨場感に乏しい。小説は、登場人物に感情移入することが可能で、歴史の現場にいるというリアルな感覚を読者に与えてくれる。

島津家出身の徳川将軍家御台所・篤姫はNHKの大河ドラマ（2008年）に取り上げられ大変なブームとなったが、その原作が宮尾登美子『天璋院篤姫』（1984年）である。宮尾登美子（1926-2014）は遊郭に生きる女性や芸道の世界の女性を描いて定評ある作家である。作品は、篤姫の視点から、藩主島津斉彬の養女として江戸への出立、徳川将軍家への興入れ、将軍家の世継ぎ問題、皇女和宮の降嫁、幕末維新の動乱、そして明治16年（1883）の逝去までが語られる。

篤姫は皇女和宮の姑となるが、武家と公家という出身の違いもあって、難しい関係にあったという。この皇女和宮の降嫁を扱った小説が、有吉佐和子『和宮様御留』（1978年）である。『天璋院篤姫』が歴史事実にかなり忠実な作品であるのに対し、『和宮様御留』は、作家が自由な想像力を発揮した作品で、実は降嫁した和宮は別人であったという替え玉説を展開する。有吉佐和子（1931-1984）は、古典芸能や歴史に取材した作品ばかりではなく、社会問題に鋭く切り込んだ『恍惚の人』などでも有名な作家である。

歴史小説作家として有名な杉本苑子（1925-2017）には、薩摩藩によって行われた木曾川の治水事業を題材にした『孤愁の岸』があるが、ここでは「秋蘭という女」（1964年）という短編を紹介しよう。主人公若江薫子は下級公家の娘で、学問の家系であったことから、後の明治天皇の皇后となる一条美子の家庭教師をしたこともある。その縁で維新後は宮中へも出入りすることになるが、極端な攘夷論を振りかざし西洋化に反対したことで宮中から逐われる。理詰めで物事を考え、世の中の変化を理解できない特異な人物が時代に置き去りにされる様子を描いた作品である。（高津）



（講談社文庫版の表紙。なお、『秋蘭という女』は品切中）



第Ⅱ部 家族

「江戸学」の祖ともいわれる三田村鳶魚^{みたむらえんぎょ}（1870-1952）は、江戸時代の夫婦関係について、武士は君命もしくは父母の命によって結婚する義理ずくの夫婦であり、公家・町人・百姓は本人たちの恋愛の具合で離合集散する恋愛夫婦であると称した。武士の妻は「一家の支柱」として家を支える一方、恋愛夫婦はその人同士の関係で一家一門の関係ではないとする（『三田村鳶魚全集』第2巻、中央公論社、1975年）。

江戸時代中期以降に広く普及した女子教訓書である『女大学』^{おんなだいがく}は、19条にわたって、女子教育の必要と理念（第1～3条）、妻としての心得（第4～14条）、主婦としての心得（第15～19条）を説いた。そこでは、齊家（家庭をおさめ整えること）と婦人自身の保全を目的とした女性の心得を家庭生活内に限定して説かれている。すなわち、女性はおもに夫を中心とした人間関係を取りもつ情緒的役割が重視され、その情緒を伸ばすための教育的配慮がなされてきたのである。

それも近世後期になると、士農工商それぞれに妻としての役割を付した書物（『女万歳宝文庫』^{おんなまんざいからぶんこ}）が刊行される。武士の妻はいつも行儀正しく、夫に不忠がましきことがあればそれを諫め、忠と義を励ますこと、百姓の妻は夫にかわって耕作を助け、常に田畑のことを考え、四季に応じて種をまき、一粒万俵の利養をはかること、工、商の妻もまた夫の職業に主体的に関わることを求めている。女性に妻としての、家政責任者としての自立を促しているといえようか。

井関隆子^{いせきたかこ}（1785-1844）は、離婚・再婚を経験し、夫の没後、天保11年（1840）正月1日から天保15年（1844）10月11日までの898日間の日記を記した（『井関隆子日記』3冊、勉誠社、1973-81年）。その日の天候、出来事はもちろん、さまざまな見聞、社会・政治などに対する批評、江戸城内の様子などが記されている。その旺盛な好奇心と豊かな学識は、彼女を天保期の批評者たらしめたといえよう。

信州伊那^{しんしゅう いな}の伴野村^{とも}の村役人の妻であった松尾多勢子^{まつおた せこ}（1811-1894）は、女性として尊王攘夷運動^{そんのうじょういうんどう}に参加した稀有な存在であった。彼女が政治的な活動に加わったのは、文久2年（1862）、52歳の時だった。それまで村や地域のなかで公的な活動に加わることもなく、村内で豪農の妻として三男四女の子どもを産み育てた。彼女は病弱な夫を助け家業に精を出す一方で、地域の和歌の仲間との交流、平田篤胤門^{ひらたあつたね}の国学の影響を受け、次第に政治的な活動に加わっていく。彼女は豪農の妻として家を支えながらも家に閉じこもってられない女性であったといえよう（アン＝ウォルソール『たをやめと明治維新』ペリかん社、2005年）。

明治維新を経て、開化期のさまざまな施策（お歯黒の廃止、女子留学生の派遣、遊女解放）は、政治や市場といった公的領域に男性を振り分け、女性を「国民」を再生産する産む性として意味づけた。夫との関係でどのような位置にある女性が次世代の国民を産むのか、婚姻関係の内部にある産む身体としての母とそれ以外の女性とを峻別する森有礼^{もりありのり}の「廃妾」論は、女性たちの序列や配置をめぐる論争を呼び起こした。

帰国した女子留学生（津田梅子^{つだう めこ}や山川捨松^{やまかわすてまつ}など）は、こうした排除と女性の役割（結婚、家事、育児、老人介護など）に抗い、昔の女とは異なる新しい生き方を求めはじめたのである。

やがて政治と市場という公的領域と私的な家族領域を明確に区分する制度や政策そのものが問われ、公的領域が成り立つために必要不可欠な領域として家族領域が位置づけられるのである。（佐藤）



しまづなりのぶしょうぞうは 島津齊宣肖像と齒

種子島熊野神社所蔵
中種子町立歴史民俗資料館寄託

図版は島津家26代当主島津齊宣（^{しまづなりのぶ}隠居後、^{けいざん}溪山）の肖像である。齊宣の指示のもと、江戸で描かれたもの。画像の作者は落款がないため不明。面長の顔でおだやかな表情をして座す齊宣の姿が描かれる。成立・伝来については、天保4年（1833）10月21日付の齊宣宛の松寿院書簡（東大史料編纂所、島津家文書）によって明らかである（15頁図版）。

松寿院は、文化5年（1808）の在国——この時、江戸で文化朋党事件（^{ぶんかほうとうじけん}近思録崩れ、^{きんしりくくず}秩父崩れ）が起こり翌年齊宣は隠居を余儀なくされる——以来帰国することのない齊宣が、領国へ下ってくることを毎年祈念していたものの、なかなかそれが実現しなかった。「何くれとなく御ゆかしさの餘り、せめて御すがたをうつしゑになりとも拝し奉らん事」を思い付いたものの、これも言い出せずにととうとう25年の歳月が経過してしまった。伊集院八蔵（^{いじゅういんはちぞう}その父が齊宣の側に仕えていた）が江戸に赴くのに言づけて、肖像を作製し送ってもらうよう周旋を命じたところ、齊宣からはもっとものことであると、肖像の製作を許



す手紙が到来、そしてついに、10月21日に「巻物一箱」が松寿院のもとに届いた。松寿院は「^{おそれ}恐をもちへりみず、はやはや拝し奉侍りなんと、きよげなる衣きかへ、かけまくも床にそなへ」て父の肖像に対した。それは、26年前に逢ったときと変わらない「勇ましき御すがた」であり、松寿院は「其かしこさ、うれしさ、夢うつつともなく」という状態であったという。そして、いつか直接会う機会が訪れることを切に願い、父の長寿をも祈って、和歌3首を手紙の末に書いて贈っている。その内の1首を紹介する。

「うつしゑを見るにつけても逢事の猶したはるゝたらち男の君」

この手紙は、肖像が届いた当日に書かれたもので、父の「うつし絵」を拝した喜びと感謝の気持ちを早く届けたいという思いが伝わってくるものとなっている。

2年後の天保6年（1835）、齊宣は27年ぶり鹿兒島の地を踏み、松寿院と再会を果たすことになる。鹿兒島に向かう途中の同年10月2日、兵庫（神戸市）の宿で、齊宣の一本の齒が抜けた。帰国後そのことを松寿院に伝えたところ、おそらく松寿院の方からは是非にと拝領を願いでたものと思われる。肖像に引き続き、父の齒を手に入れた彼女は、晩年種子島に持って渡り、同島の熊野神社に奉納したのである。齊宣は鹿兒島で歌舞伎を開催したり、江戸から連れてきた講談師伊東陵舎（^{いとうりょうしゃ}）に講談をさせたりしたが、松寿院も同席して楽しんだ。天保7年9月1日、齊宣は鹿兒島を後にする。松寿院と齊宣は、この後二度と対面することは叶わなかった。

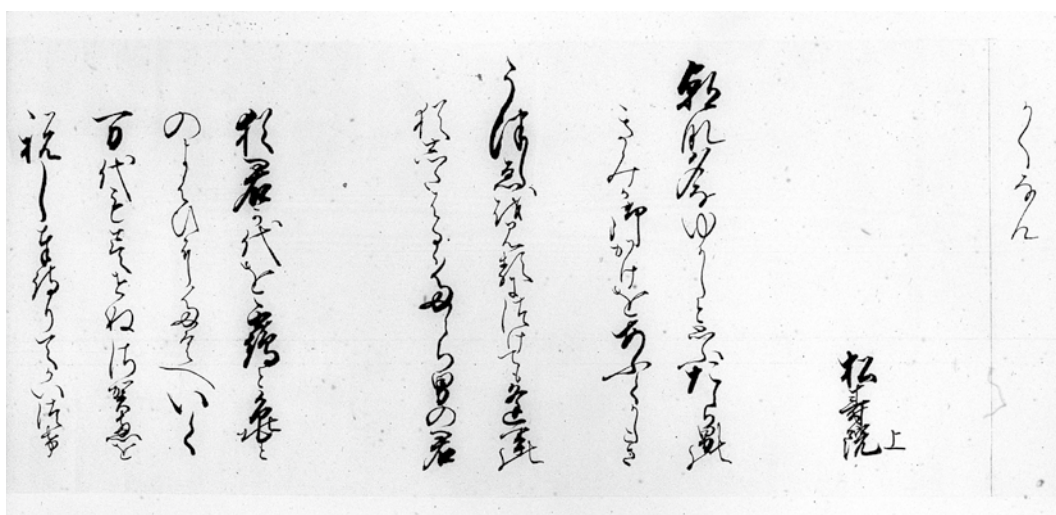
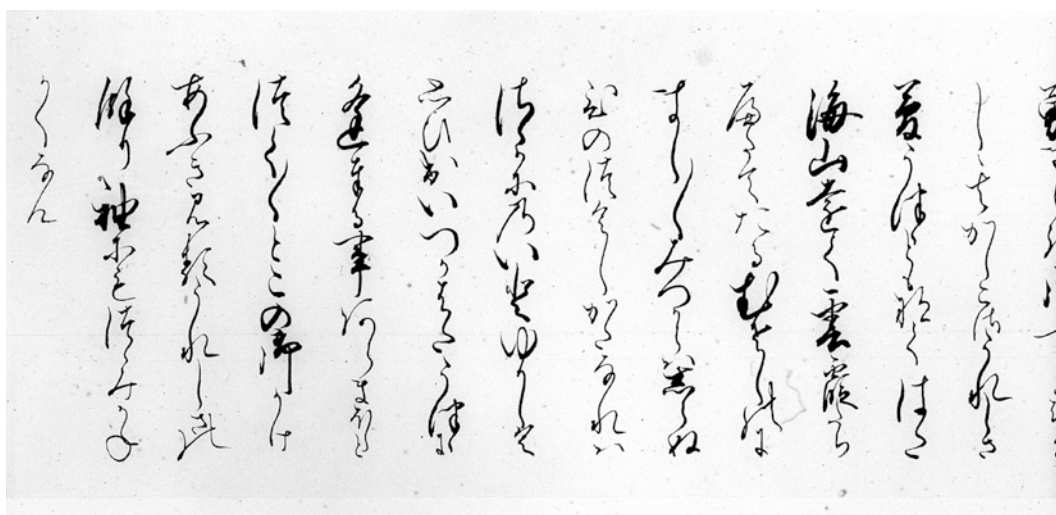
齊宣の肖像画としては尚古集成館蔵の肖像が知られるほか、宮崎県の個人宅に、佐土原島津家に伝来したものと推定される肖像画一幅が確認できる。後者は熊野神社蔵の肖像とよく似ており、松寿院の妹で、佐土原島津家に嫁した随姫（^{よりひめ}随真院）に贈られたものと推定される。（丹羽）



松寿院が齊宣より拝領した歯



齊宣の歯を納めた箱



松寿院書簡（島津齊宣宛、天保4年10月21日）〈部分〉
 〈『島津家文書マイクロ版集成』より〉



しゅうせいくん 修斉訓

鹿児島大学附属図書館所蔵 玉里文庫

大本二巻二冊、袋欠。安政4年(1857)刊。
京都の人山本邦好が、清代の史典等による『願体広類集』を抄訳した教訓書。毛利貞斎による和解『広類願体俚諺鈔』(享保10(1725)刊)があり、常盤潭北の『百姓分量記』(享保11年(1726)刊)の跋に「近日世に行はるる」書の一として挙げられている。本書の内容は十八章に分かれ、父子兄弟、夫婦などの人倫を説き、陰徳・積善といった徳を勧める。漢語の左傍に俗訓を付すスタイルも含め、江戸の教訓絵入り本の一典型を示しており、初学の町人を読者として想定していたようである。「女」を論じようとする明治の言葉が常に向き合わなければならなかったのは、こうした女庭訓や女大学などの教訓書が説く倫理であった。



『修斉訓』やその原典である『願体広類集』は、明治にも読まれた。明治の啓蒙知識人である西村茂樹の文や雑誌「女学世界」の評論にも、その名が見えている。(多田)

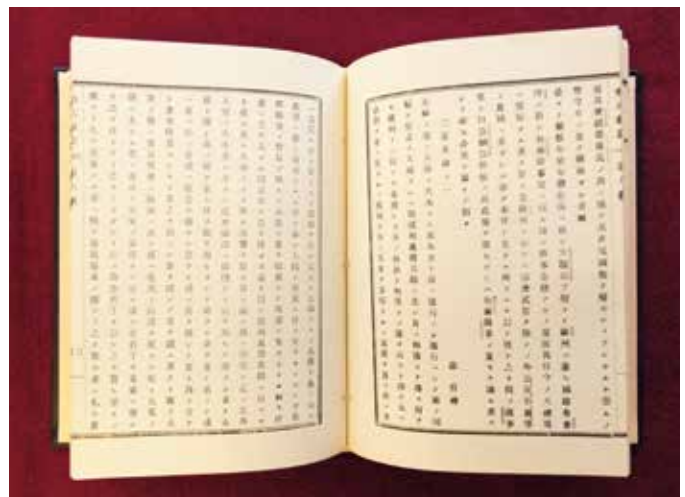
『修斉訓』やその原典である『願体広類集』は、明治にも読まれた。明治の啓蒙知識人である西村茂樹の文や雑誌「女学世界」の評論にも、その名が見えている。(多田)

もりありのり さいしょうろん 森有礼「妻妾論」

『明六雑誌』、明治7・8年
復刻版 鹿児島大学附属図書館所蔵

初代文部大臣として近代学校制度・教育制度の創出を行った森有礼(1854-1929)は、東京女子高等師範学校(現在のお茶の水女子大学)の教育改良に携わるなど、女子教育に力を傾注したことで知られる。

「妻妾論」の掲載誌「明六雑誌」は、明治初期啓蒙知識人の結社である「明六社」の機関誌。有礼の論(8・11・15・20・27号掲載)は福澤諭吉「男女同数論」と併称される、当時の積極的男女同権論の一。諭吉が女性に男性と同じ程度の権限を与えるべきことを論じたのに対し、有礼は終始「女子ノ職分」を「母」たることに求めながらも、婚姻法の具体的な提案に踏み込み、結婚可能な親等の制限や契約結婚を提唱し、男性側への権利制限をも唱えた点に特色がある。両者の論については、加藤弘之の反論「夫婦同権ノ流弊論」(31号)が出るなど、「明六雑誌」誌上でも活発な議論がたたかわされた。(多田)





こう か や え し ゃ し ん 江夏八重写真

鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵

ウィリアム・ウィリス（1837-1894）は北アイルランド出身の医師で、文久2年（1862）に英国領事館付き医師として来日、翌年の薩英戦争後、イギリスと薩摩藩が友好関係を築くなかで、ウィリスも西郷隆盛^{さいごうたかもり}ら薩摩藩士と交流をもつ。明治3年（1870）に鹿児島医学校兼病院設立のため4年契約で鹿児島に赴任、この間、江夏十郎直義^{こうかじゅうろう}の四女八重^{やえ}（1852-1931）と知り合う。ふたりの間にはアルバートが誕生するが、明治10年（1877）西南戦争の勃発でウィリスは鹿児島を退去、そのまま単身帰国。再び来日するも職を得られず、アルバートを連れて帰国してしまう。八重は一時、アーネスト・サトウ^{たけだかね}の妻武田兼のもとに身を寄せるが、その後、別の男性と結婚。明治39年（1906）3月、オーストラリアで牧場を営んでいたアルバートは八重に会うために来日、東京で再会を果たす。翌年8月、ふたりは鹿児島を訪問した。ウィリスの門下生たちは磯^{いそ}の風景楼で盛大な歓迎会を開催、これは新聞でも大きく取り上げられた。図版の二人の写真は大阪の写真館で撮影されたもの。（丹羽）

こう か や え えい そう し ゃ ほ ん 江夏八重 詠草 写本

鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵

大本一冊（仮綴）。墨付21丁。表紙には右肩に「とらのむ月より」とあり、中央に「詠草」、左下に「えなつの八重子」とある。三首めに「父君の五十の御賀に」として、「つるかめのちよ万代もたらちねのうへこと祝ふ時はきにけり」とあるが、文化10年（1813）生まれの父十郎^{じゅうろう}が50歳に当たるのは文久2年（1862）、同年は成年であるので表紙の「とら」は不審。一方、図版の左から二首めのように、八重の次兄である直矢が添削（「直矢評」とある）をして、（鶯の）「鳴声はかり面しろきかな」という下の句を「囀^{さえず}ることにとけかりけり」と手を入れていることが注目される。点を掛けているのも直矢であろうか。また、「第二の兄君京へ登り給ふをおしみて」と前書きする歌もある。直矢の上京は万延元年（1860）。表紙の「とら」年の可能性が高いのは慶応2年（1866）で、かつて詠んだ歌をこの年にまとめて写したとも考えられる。なお、真偽未考ながら、八重は7歳から八田知紀^{はったともり}に入門したという（鹿児島新聞、明治39年3月20日）。本書は和歌の詠作に励んでいた少女時代の詠草を収めたものといえよう。（丹羽）

江夏家の人々

江夏家は中国福建連江県の出で、初代の江夏友賢（1538 - 1610）は囚われて日本に來たり、川内、のちに入来院（薩摩川内市入來町）に住した。家学の易学によって島津義弘に召し出され、屋形や城の建設、いくさの吉凶を占ったという。友賢は、來日した明国の使者沈惟敬とも面会し、易や漢詩で名声を得た。慶長15年（1610）加治木で没した。

嫡流はその後、鹿児島城下上之園に住し、友賢より11代の末裔、次左衛門蘇助は、第二次（米國）留學生としても知られている。

本稿で取り上げるのは、この家から分かれ、28代島津家当主島津斉彬の側近として尚古集成館事業を支えた江夏十郎直義家の人々である。

十郎の祖父喜斎直行は鍼灸医として8代藩主島津重豪に仕え、父瑞泰（喜安）も同じく藩主の側に仕えた。瑞泰には男子に恵まれなかったため、次女の古登に松崎家から贅養子をとって家を継がせた。これが十郎直義である。十郎は、斉彬が藩主になった嘉永4年（1851）小納戸御伽役に拔擢され、数々の献策を行うとともに、市来四郎らとともに反射炉や砲台の建設、ガラスや大砲の製造などに関与した。安政5年（1858）には寺島宗則とともに長崎に赴き、軍艦・小銃・大砲の購入に奔走していたが、病氣となる。病床で斉彬の訃を聞き鹿児島に戻ったが、隠居斉興により集成館も閉鎖され、十郎は砲台建設資金横領のかどで謹慎を申し渡される。その後、十郎は郊外の荒田村と中村に土地を求め、農業に従事、幕末の動乱期を過ごし、明治維新後間もなく東京に出て明治5年（1873）7月16日に61歳で没した。

十郎と古登との間には、6男7女があった（うち1男2女は早世）。長男喜太郎（干城）はペリー來航時、田町藩邸の警備に江戸に下り、奥小姓を務め、のち、山階宮家の付人になった。明治後は博覧会事務局に出仕、明治5年（1873）には木脇啓四郎らと日向國（現、宮崎県）の産物調査を行っているが、その後実業の世界に転じ、中牛馬会社の社長になる。しかし、西郷隆盛の挙兵と呼応して事をかまえたとして国事犯として逮捕され、その後は不明。次男の壮七郎（直矢）は安政3年（1856）江戸の昌平黌書生寮に入るが、間もなく退寮、京都に赴き栗田宮（のち、久邇宮朝彦親王）の付人となるが、元治元年（1864）、病氣のため鹿児島に帰り死去（31歳）。三男の正一郎（直行）は越前島津家の奥小姓を務めたあと、攘夷派にくみし、慶応3年（1867）に仲間と京都の宇和島藩邸を襲撃した。斬りあいとなり、その場を逃れたが、鹿児島にもどり切腹して果てた（30歳）。

次女の歌子は、維新前後で上記のような家の栄華と没落を目のあたりにした。彼女自身は、維新後もなく、伊東四郎（のちの海軍大將伊東祐亨）と縁組を行ったが、父十郎が亡くなった五日後、離縁されている。「たらちねの父君まさばかくはかりかなしき事はあらまし物を」と詠んだ（江夏歌子『なみだの雨』）。三女の千衛は島津家の別邸玉里邸に勤め、四女の八重は明治4年（1871）にイギリス人医師ウィリスに嫁した（詳細は別項参照）。

六男の銀次郎（英洲）は明治26年（1893）千島列島を探検した。
まさに江夏十郎家の人々は動乱の時代に数奇な運命に翻弄された人々である。（丹羽）

【参考文献】

川畑利久「東京大学史料編纂所蔵本「江夏家文書」「江夏書類」『鹿児島歴史研究』第5号 2000年9月
『幕末維進を駆け抜けた英国人医師一甞るウィリアム・ウィリス文書一』（解説；吉良芳恵）創泉堂出版 2003年

ありむら しょじょう 有村れん書状

鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵

ありむら れんじゅいん（のち蓮寿院、1809-1895）は、有村俊斎（のちの海江田信義）、有村雄助（桜田門外の変に加われず藩命により切腹）、有村次左衛門（桜田門外の変で井伊直弼を討ち取り自害した）、有村国彦（第五国立銀行頭取などを務めた）の母にあたる。

有村俊斎は、文久元年（1861）12月、日下部伊三治（安政の大獄で捕縛され獄死）の次女・まつと結婚すると同時に婿養子となって海江田信義と改名（海江田は日下部の旧姓）。したがって、この母・れんから息子・海江田信義に送られた4通の手紙は、文久元年12月以降に書かれたものと推定される。

この手紙には、国許の様子（「こゝ元皆々元気両家子供大あばれニ候」「こゝ元ハ何も相替らす無事大元
気、…今日大そふぢいたし、たんすなと入付（据えつけ）にきにきしき事（にぎやかなこと）」など）を
知らせるとともに、母から子への気遣いの言葉（「御くたひれなき様ニと、暮々ねん入いたし候」「何れニ
も寒むさの御用心返々も御大切ニ御ほようなし給り度、武運長久いのりまいらせ候」など）があふれて
いる。（佐藤）

幕末・維新期に活躍した夫と妻たち

西郷隆盛を支えた3人の妻

西郷隆盛^{さいこうたかもり}は生涯に3度の結婚をしていることはよく知られている。24歳のときに結婚した須賀^{すが}、奄美大島^{せんきよ}に潜居していた31歳のときに結婚した島妻^{あいかの}、そして遠島となった沖永良部島から帰還して約1年後の37歳のときに結婚したイト（糸子）である。

須賀との結婚後、西郷は薩摩藩主島津斉彬^{なりあきら}に抜擢され、参勤交代の江戸への御供、江戸詰を命じられ鹿児島を出発、江戸へ向かう。西郷は3月6日に江戸に着き、翌4月、斉彬^{にわかつやく}の庭方役となる。須賀は西郷が江戸に行って留守のなか、少ない扶持米^{ふちまい}で西郷の5人の弟妹の面倒をみていた。ところが、その苦しい生活を見かねた父親が呼び戻したといわれている。その後、離縁が決まる。

西郷は安政5年（1858）11月16日、月照^{げしやう}とともに錦江湾^{きんこうわん}に入水^{じゆすい}、一命をとりとめて、菊池源吾^{きくちげんご}と変名し、奄美大島に送られた。これは遠島ではなく、幕府の目から逃れるための「潜居」であったため、島の代官所から禄をもらって龍郷^{たつごう}の借家で暮らしていた。その時に娶った妻が、島の名家の一つ龍家^{りゅうか}の娘・愛加那^{あいな}だった。1年後には息子の菊次郎^{きくじろう}が生まれ、新しい屋敷を建てて新居に移った直後に西郷の元に藩からの帰還命令が届く。西郷は屋敷と新たに田一反を愛加那に買い与えて島を離れ、薩摩に帰還したあと、西郷と愛加那の娘・菊草^{きくそう}が生まれる。

西郷が3度目の結婚で妻として迎えたのが、薩摩藩士・岩山直温^{いわたまなおつ}の娘・イトである。元治2年（1865）、薩摩藩家老の小松帯刀^{こまつたてわき}の媒酌によって結婚。イトは鹿児島と京都の間を奔走していた西郷にかわって留守宅を守ることになる。かの坂本龍馬^{さかもとりょうま}はイトを「西郷吉之助の家内も吉之助も大いによい人なれば」と評している（慶応2年〈1866〉12月4日・坂本乙女宛）。イトは西郷との間に3人の男子（寅太郎^{とらたろう}、午次郎^{ごじろう}、酉三^{ゆうぞう}）をもうけ、さらに愛加那との間に生まれた菊次郎・菊草も引き取り、実子と同じように育て上げたという。

大久保利通を支えた満寿子とおゆう

大久保利通^{おおくぼとしみち}は、安政4年（1857）12月、薩摩藩士・早崎七郎右衛門^{ますしこ}の次女・満寿子と結婚。利通は島津久光の下で頭角を現すようになり、文久3年（1863）には御側役^{おそばやく}にまで登りつめた。

明治維新後、大久保は活動の拠点を東京に移す。東京時代の大久保の側にはおゆうという京都祇園のお茶屋一力亭^{いちりきてい}の娘で、「錦の御旗^{にしき みはた}」の生地を調達した人物ともされる女性がいた（明治43年〈1910〉11月27日山本復一氏談^{やまもとまたかず}）。このおゆうとの間に、大久保利夫、大久保駿熊、大久保七熊、大久保利賢^{としかた}が生まれた。

一方、満寿子は大久保利和^{としなか}、牧野伸顕^{まきののぶあき}、大久保利武^{としたけ}、石原雄熊、芳子を鹿児島で育て、明治7年に上京し、大久保と一緒に暮らしはじめる。厳格な風で、家でもむっつりとしていた大久保であったが、

役所に出勤するさいや5分でも暇があると、小さい子どもを書斎へ連れて行き、キャッキョと戯れる子煩悩な一面があったことが知られる（明治43年10月4日・牧野伸顕氏談）。

大山巖と山川捨松

大山巖^{おおやまいわお}は西郷隆盛の従兄弟で、薩英戦争に初陣して近代火砲の威力に驚き、江川太郎左衛門^{えがわたろうざえもん}に砲術を学び、弥助砲^{やすけほう}を開発。会津戦争では薩摩藩二番砲兵隊長として従軍した。この時の会津若松城には、のちに後妻となる会津藩家老山川尚江重固^{やまかわな おえしげかた}の末娘・捨松^{すてまつ}（幼名は咲子^{さきこ}）とその家族が籠城していた。

大山は、明治3年（1870）、渡欧し普仏戦争においてプロシア側に従軍、翌年4月に帰国後、11月に再び渡欧してフランスで軍政および砲術を研究した。

一方、山川捨松も明治4年北海道開拓使派遣の最初的女子留学生の一人として津田梅子らと渡米、「捨松」の名は捨てたつもりで帰国を待つ（松）という母の思いに由来している。明治15年、捨松が帰国したころ、後妻を捜していたのが参議陸軍卿となっていた大山巖だった。アメリカの名門大学を成績優秀で卒業し、フランス語やドイツ語に堪能だった捨松に白羽の矢が立ったのである。しかし、薩摩藩の大山と会津藩の山川は会津戦争を戦った敵同士。ところが、捨松は大山の人柄を知るべくデートを提案。デートを重ねるうちに互いに惹かれあい、交際3か月で結婚する運びとなった。敵同士の恋愛結婚だったのである。（佐藤）



大蘇芳年「鹿兒島明暗録」（鹿兒島大学附属図書館所蔵）

第Ⅲ部 表現

「表現」は、最近の近世女性史の分野では非常に広義の用語として用いられている。すなわち、「表現」という言葉から直接想起される「詩歌、日記、書画、工芸などの文芸的な表現」だけではなく、「寺院建立や政治的、社会的な貢献をした女たち、さらには、さまざまな立場で人生を精一杯生きた女たちの足跡」も、女性たちの残した「表現」と位置づけられつつある（柴桂子『NHK カルチャーラジオ 歴史再発見 江戸期に生きた女表現者たち』、NHK 出版、2016年）。本図録では、すでに第Ⅰ部・第Ⅱ部の解説において女性と政治・家族との関わりなどについてはある程度示されていることから、ここでは、文字や文章、絵画といった表現手段を女性がどのように獲得していたかという点に絞って解説する。

江戸時代において女子が読み書きを身につけることのできる場所として、よく知られているのは寺子屋であるが、そこに通うことが女性のリテラシー（読み書き能力）獲得の唯一の道だったわけではない。中・下級の武士層や上層部庶民層、中でも学者・宗教者・医者などの知識人層においては、親族や友人・知人のなかにいる師匠クラスの人材や文人を利用して、娘により高いリテラシーを身につけさせることもあった（笠間千浪『『西薩婦女』考—『賤のおだまき』解説』、『現代語訳 賤のおだまき』、平凡社、2017年）。また、しまづなりあきら^{てるひめ}の娘^{しんせんひめ}が平田宗敬を侍読としていたように（鹿児島県立図書館所蔵「新撰姫鏡」）、藩主の娘ともなれば藩士や奥女中のなかの教養人について学ぶことも可能であった。

そうした学びの成果として、江戸期の女性たちは、自分のなかにある考えや思いを具体的なかたちで表現することができた。伝統的な和歌だけではなく、日記、絵画、俳諧、漢詩など広汎な分野で女性たちが活躍した。江戸期女性文化の層の厚さ、底深さは、近代文化を生み出す土壌になったと言われる（柴桂子「女性の文化の広がり」、総合女性史研究会編『日本女性の歴史 文化と思想』、角川書店、1993年）。

明治に入り、新政府は様々な重要政策を実行に移すが、教育改革もその一つであった。明治5年（1872）、「学制」の公布にあたって布告された「学事奨励に関する被仰出書^{おおせいだされしよ}」には、「自今以後一般の人民＜華士族農工商及婦女子＞必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめんことを期す」（＜＞内は割注）と記されている。特に「婦女子」の語が付け加えられていることから分かるように、明治新政府は、男子だけではなく女子も就学させることを主張したのである。ただし、明治12年（1879）に発布された「教育令」以降、男子教育とは別系統・別学・別内容の女子教育が行われることになる（総合女性史研究会編『史料にみる日本女性のあゆみ』、吉川弘文館、2000年）。（金井）



楊洲周延「踏舞会 上野桜花観遊ノ図」（鹿児島大学附属図書館所蔵）



つぎきのりこ むらおかのかつばね たんざく 津崎矩子（村岡局）短冊

鹿児島大学附属図書館所蔵

津崎矩子は天明6年（1786）生、明治6年（1873）8月23日没、88歳。幕末の近衛家に仕え、女中名は村岡局と称した。勤王家としても名高く、水戸藩士や西郷隆盛、月照らと交流した。また篤姫（天璋院）が近衛忠熙の養女として13代将軍徳川家定と婚儀を結んだ折に養母役を務めた。展示している短冊は「八十六歳」とあることから明治4年ごろ京都嵯峨にいたころの詠と考えられる。（亀井）

ちりあくたとりあつめたる言のはは
かくもかゝれずみるもうるさし

八十六歳 村岡矩子



さいしょあつこ ひつ しよふく 税所敦子筆 書幅

個人蔵

税所敦子は歌人。薩摩藩士税所篤之の妻。通称は千代瀬・楓内侍。京都生まれ。千種有功に和歌を学び、近世後期に京都を中心に流行した香川景樹の桂園派と交わる中で、当時京都薩摩藩邸にいた同じ桂園派の税所篤之の後妻となった。28歳で夫と死別した後、薩摩に下り、姑に孝養を尽くした。

その歌才・教養から藩主島津斉彬の世子哲丸の守役を仰せつかり、また光蘭院貞姫の婚儀の際には老女として付き従った。明治維新後は、薩摩出身の高崎正風の推挙を受けて宮中に入って権掌侍に任じられ、昭憲皇太后に仕え、女官に歌文を教えた。文政8年（1825）生、明治33年（1900）没、76歳。

展示している書幅は初秋の水辺の景色を和歌とともに絵も税所敦子が描いている。「明治の紫式部」と称せられた彼女の高い教養の一端を示す書幅であると言えよう。ちなみに、この和歌は税所敦子の家集『御垣の下草』および『御垣の下草』後編にも収載されていない。（亀井）

ほたとぶ池のみぎはにさきにけり
まだ初秋の月草の花

あつ子 画も





なかじまうたこ たんざく 中島歌子短冊

鹿児島大学附属図書館所蔵

中島歌子^{なかじまうたこ}（1841-1903）は江戸の生まれ。夫の水戸藩士^{はやしちゅうざえもん}林忠左衛門は、天狗党^{てんぐとう}の挙に加わって斃れた。のちに桂園派^{けいえんは}の加藤千浪^{かとうちなみ}に歌を学び、明治期には御歌所歌人^{おうたどころ}と交わり、歌塾「萩之舎^{はぎのや}」を設立、明治歌壇の中心人物となる。門弟は千人を超えたとも言われ、後に小説家として立った樋口一葉^{ひぐちいちよう}や田辺花圃^{たなべかほ}も、萩之舎における旧派歌人の文学圏から出発した。

短冊は題「撫子帯露」、歌は「ちりをだにすえぬまがきのなでしこにたがゆるしてか露はおくらん 歌子^{まがき}」。籬に咲く汚れなき撫子^{なでしこ}が露に濡れる、すなわち乙女が涙に濡れる様を嘆く歌。撫子の古称は常夏、『源氏物語』等に引かれる「塵をだに据ゑじとぞ思ふ咲きしより妹と我が寝るとこなつの花」（古今集・夏、躬恒^{みつね}）が参考歌として挙げられよう。

一葉の日記には師である歌子の名が、その死後にも多く登場する。『一葉歌集』（大正元年（1912））には撫子を詠んだ歌として「たらちねの親心してめづるかなわが袖垣の撫子の花」（題は「愛撫子」）がある。愛しい少女としての撫子のイメージをめぐって、両者の視角——歌子は雅の人、一葉は戸主となる女丈夫——が交錯する様を見ることができようか。（多田）

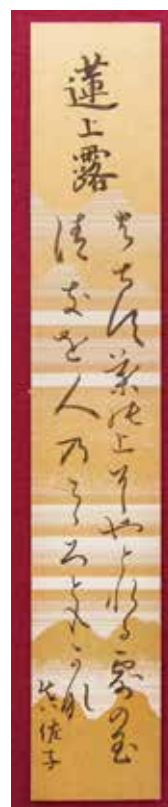


みわだまさこ たんざく 三輪田真佐子短冊

鹿児島大学附属図書館所蔵

三輪田真佐子^{みわだまさこ}（1843-1927）は京都生まれ、幕末漢詩壇の中心人物である梁川星巖^{やながわせいがん}とその妻紅蘭^{こうらん}に学んだ。のち、伊予松山藩の国学者であった三輪田元綱^{もとつな}と結婚。夫の死後、教育者として立った。東京に私塾翠松^{すいしょう}学舎を設立、東京女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）、日本女子大学校で漢学を教授。和漢の教養を前提とし、英学や数学をも重視した真佐子の女子教育方針は、今日、彼女の創設した三輪田女学校（明治20年（1887）創立、現在は三輪田学園）に受け継がれている。

短冊は題「蓮上露」、「はちす葉の上にやどれる露の玉清きを人のこころともがな」。蓮上の露を人の心の清浄さと見立て、人々の心もこのようであってほしい、と願う歌。釈教歌^{しゃっきょうか}の題材でもあった蓮の露を社会改良の規範へと見立てかえた一首には、教育家としての真佐子の決意が現れていよう。（多田）



薩摩の女性と書

江戸時代、身分のある女性たちは教養（たしなみ）として、和歌や琴などの楽器、書、絵画などさまざまな技芸を身に付けたことは明らかだが、どのような方法で技芸を身に付けたのかについて語ってくれる資料は極めて乏しい。そうした中で、鹿児島大学附属図書館玉里文庫にある『誠忠武鑑』の裏打ち用紙として使われた「重富島津家奥日記」は19世紀初め、島津一門家の女性がどのような手本をもとに書を身に付けたのか、その一端を窺い知る稀な資料である（年月日は未詳）。

— さかな 一かこ

— 御銚子 一樽

於珎様より被遣候、中原林左衛門殿^江、此程より度々御手本認さし上られ候二付、御あい拶として被遣候事。

於珎（1798 - 1869）は重富島津家の2代当主忠救の娘で、文化13年（1816）、同じ一門家である今和泉島津家9代の忠喬に嫁いだ。忠喬は本家より忠剛を養子に迎えて10代目を継がせ、その娘が徳川家の御台所となった天璋院（篤姫）。つまり、於珎は篤姫の祖母ということになる。

この日、さかな一籠と、酒一樽が中原林左衛門に贈られたが、それは手本をしばしば於珎に呈上したことに對する返礼のためであった。中原林左衛門（生没年不詳）、諱は貞正、8代藩主島津重豪の右筆で、大橋流の書家であった（『薩州名家伝』巻四）。大橋流は、御家流の一派である。御家流は青蓮院流ともいい、鎌倉時代に青蓮院門主の尊円法親王が始めた書法で、江戸時代、公文書に広く一般に用いられた。唐様に対する和様の代表的な様式で、温和かつ流麗な筆法を特徴とする。現在、於珎（結婚して於義と改名）の筆跡を確認することができないので、中原林左衛門からどれほどの影響を受けたかは明らかではないが、右筆が上層武家の師範になるのは自然であり、その影響力は大きかったことと思われる。

上記の他、上級武士の子女が右筆の指導を受けていた例がある。明和9年（1772）「御右筆稽古」の職にあった折田清右衛門親常は、重富島津家の屋敷に、稽古日を定め一月に六度ずつ出張して、嫡子若狭ら兄弟四人などに教授を行った。他にも島津五郎家、種子島弾正家、肝付弾正家にそれぞれ月六度ずつ、合わせると月24日出張していることが知られる（五味克夫「折田親常一世大概之覚」、『鹿児島女子大学研究紀要』18号、1997年）。（丹羽）



中原林左衛門書（鹿児島県立図書館所蔵）



押川栄 謝辞・作文二題

鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵

^{おしかわえい}押川栄（1864- ?）は薩摩の人。鹿児島師範学校卒業後、明治9年（1876）に東京女子師範学校に県から派遣され学んだ。卒業後は千葉・成田山新勝寺が経営する幼稚園に勤務するが、父の死に伴い帰郷。一時師範学校の教壇に立ったともいうが（未詳）、父の工場を母とともに経営した。

彼女の作文は、明治5年（1872）の学制以後の女子教育が女性の言葉にもたらした可能性を如実に示すものであると言えよう。明治初期に^{むら}簇がり出る女性向け作文教科書は、ほとんどの場合書簡文の書き方を示すのみであり、その実態は江戸の往来物と大差ないものであった。それに対し、^{おおやまつなよし}大山綱良（鹿児島県令）に向けて読まれた栄の「謝辞」は、彼女の世代でなければそもそも書く場も朗読の場も与えられなかった文書である。さらに、一方で一人称を「余」としつつ漢文直訳体で^{さいごうたかもり}西郷隆盛の事蹟を語り、もう一方で春の観花をやわらかな和文で描き出してみせる——書体の差に注意——という二つの作文の見事な書き分けは、「女ことば」を強いられた女性が様々な文体を使い分けていかなければならなかった明治の文章表現のありようを、今なお我々に開示しているのである。（多田）

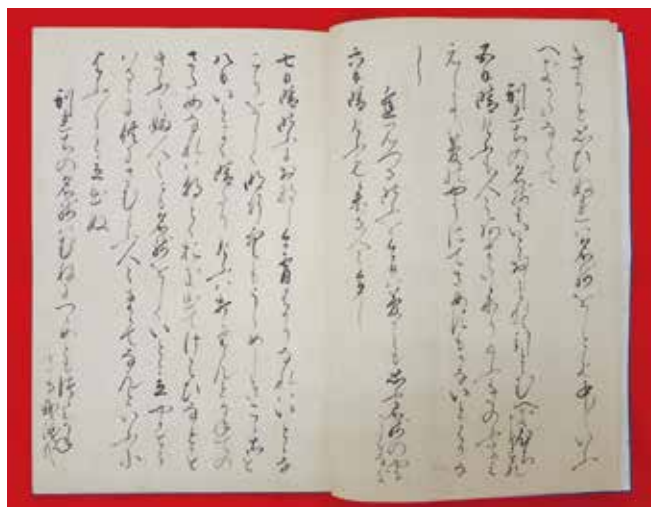
光蘭院「道乃記」

始良市加治木郷土館所蔵

^{さだひめ}貞姫（^{こうらんいん}のち光蘭院）は加治木島津家第9代^{ひさなが}久長の娘で、^{なりあきら}斉彬の養女として、^{このえただひろ}近衛忠熙の子^{ただふさ}忠房へ嫁いだ。本書は文久3年（1863）11月、近衛家へ輿入れのために、貞姫が鹿児島を出立し、12月11日に京都^{にしきこうじ}錦小路の薩摩藩邸へ至るまでの道中記である。この1週間後の同月18日に婚儀が執り行われ、貞姫は19歳で忠房に嫁した。この時に^{さいしよあつこ}税所敦子が付き添った。^{ふみまろ}近衛文麿は貞姫の孫にあたる。

薩摩川内・阿久根・出水を経て、阿蘇・久住を越えて^{さかのせき}佐賀関から海路大坂へ向かう途上、貞姫

は、故郷を離れる悲しみや心細さや名所を訪れた喜びなど、折に触れて和歌で心情を表現している。この時代の女性の表現手段としての和歌の意義がよく表れている一書といえよう。（亀井）





かごしまことば たね 鹿児島言葉わらひの種

真田宝物館所蔵

方言書。島津久光^{しまづひさみつ}の養女であった輯子^{おさこ}（実父は公家華族の竹内治則^{たけのうちのり}）が、信濃松代藩最後の藩主真田幸民^{ゆきもと}に嫁ぐ前年の明治32年（1899）5月に、東京市麹町区三年町（今の東京都千代田区霞が関）にあった玉里島津家の邸^{たまざと}で書写したもの。原著者は不明ながら、明治時代の鹿児島方言の実態を知ることができる貴重な資料である。冒頭に記された鹿児島方言の音韻的特徴についての記述や、「婦人の用ゆることば」「下より上ニ使ふ語」等の方言語彙集的部分も興味深い。何より目を引くのは本書の大半を占める方言会話とその対訳であり、江戸時代の方言書と比べると実用書性格が強くなっている。対訳の東京語も江戸語が明治の激動を経て全国共通語へと脱皮する途上の姿を残しており、鹿児島方言ともども興味深い。（内山）



島津忠義の娘たち（尚古集成館所蔵写真）

島津輯子とことば・絵

島津輯子^{しまづおさこ}は元治元年（1864）4月に公家^{たけのうちのり}の竹内治則の長女として生まれた。竹内家は公家としては珍しく清和源氏に連なる家系で、八幡^{はちまん}太郎義家^{たろうよしえ}の弟新羅^{しんら}三郎義光^{さぶろうよしみつ}を祖とし、代々、村上源氏^{むらかみ}の久我家^{こが}に諸大夫^{しよだいふ}として仕えていたが、永禄3年（1560）14代季治^{すえはる}の代に將軍足利義輝^{あしかがよしてる}の執奏により堂上の列に加えられた。家格は半家^{はんけ}、極位極官は正三位非参議、江戸時代の家禄は187石。弓箭^{きゅうせん}と笙^{しょう}、和歌を家学としていた。維新後の爵位は子爵。輯子は明治9年（1876）に島津久光^{ひさみつ}の養女となり、加治木島津家の島津又八郎^{またはちろう}に嫁いだが、離婚。同33年（1900）に信濃松代藩の元藩主真田幸民伯爵^{さなだゆきもと}と結婚してその三番目の夫人となったが、明治36年（1903）幸民の死により短い結婚生活は終わりを迎えた。以降は前当主末亡人として、家督を継いだ幸正（幸民と最初の夫人との子）、幸治（幸正の子）の二代にわたって真田家を支え続け、昭和3年（1928）10月に逝去した。諡号は眞浄院。実妹の田鶴子^{たづこ}も玉里島津家二代忠濟公爵^{ただなり}の妻となっており、島津家とは何かと縁が深い。とは言え、その出自と経歴からして久光の養女となる以前は京都と東京以外には住んだことがなかったと推測されるので、言葉の問題にはさぞ苦労したものであると思われるが、それでも折に触れ耳にした鹿児島方言に親しみを覚えていたからこそ『鹿児島言葉わらひの種』のような方言書をわざわざ書写し、嫁ぎ先にまで携えて行ったのであろう。

輯子は女流女子教育家として知られる跡見花蹊^{あとみかけい}（1840-1926）が明治8年（1875）に東京府中猿楽町^{なかさるがくちやう}（現在の東京都千代田区神田神保町）に開校した跡見女学校（現在の跡見学園の前身）に妹の田鶴子とともに入学している。花蹊は円山派^{まるやまは}の絵画を能くしており、入学した子女に書、詩文とともに絵画も教えていたというから、輯子に絵の手ほどきをしたのは花蹊自身であった可能性もある。図版は輯子筆の『新羅三郎足柄山之図』。後三年の役で苦戦していた兄義家を助けるために奥州に向かっていた義光に理由も言わず付いてきた豊原時秋^{とよばらときあき}に対して、義光の笙の師であった亡き父時元から生前に伝授されていなかった太食調^{たいしきじやう}調曲^{じやうきよく}という秘曲を義光に伝授してもらいたいがために付いてきたことを察し、足柄山^{あしがらやま}の山中^{たて}に楯を敷いてその上で伝授したという『古今著聞集』に記載された説話を画題としている。義光は実家の竹内家の祖であり、笙は竹内家の家学でもある。祖先の誇らしいエピソードを画題として選んでいることもさることながら、落款^{らくかん}の「源氏」もまた出自に対する輯子の誇りを感じさせるものと言えよう。（内山）



さんぶくつい しんぞう 三幅対の神像

熊野神社所蔵
中種子町立歴史民俗資料館寄託

熊毛郡中種子町にある熊野神社は享徳元年（1452）に種子島幡時^{たねがしまはたとき}によって、紀州熊野権現を勧請して建てられ、代々の当主に篤く信奉された。本図は、安政5年（1858）11月26日に松寿院が見た夢を、種子島家に仕えた柳田来鳳^{やなぎたらいほう}が描いたもので、松寿院によって熊野神社に寄進されたものである。

向かって左が、月を神格化したもの、または阿弥陀仏^{きやうぶつ}の脇侍である勢至菩薩^{せいしぼさつ}の化身とされる「月天子」^{がつてんし}、中央が「熊野権現」^{くまのこんげん}、右が、太陽を神格化したもの、または観世音菩薩^{かんのんぼさつ}の化身と考えられていた「日天子」^{にってんし}である。（亀井）

（箱裏書）

「松寿君自小少篤信熊野 権現之盛徳威霊、故宮祠于庭／中旦暮敬拝之。今茲戊午冬十一月二十六日、夢二神随鹿在天／橋日月雙出于波上、且夢中詠一首之国歌、寤後尚記之。因下／命於臣鳳写其図。 君手題其歌藏之巾箱云、安政六歲次戊午／晩冬侍医柳鳳奉 命録。」



夢中哥
みすがたを仰ぎし夢は三熊野の
神の恵みにあふぞかしこき
松寿院
松寿院



平成29年度 鹿児島大学附属図書館貴重書公開

女性たちの明治維新

平成29年11月発行

編者 金井 静香(本学教授)

執筆 内山 弘(本学教授)

亀井 森(本学准教授)

高津 孝(本学教授)

丹羽 謙治(本学教授)

金井 静香

佐藤 宏之(本学准教授)

多田 蔵人(本学准教授)

日隈 正守(本学教授)

発行 鹿児島大学附属図書館 <http://www.kagoshima-u.ac.jp>
〒890-0065 鹿児島市郡元1丁目21-35

☎099-285-7460

印刷 斯文堂株式会社

かごしま
明治維新博

150th Anniversary

正 誤 表

ページ	誤	正
p5 コラム本文 21行	取って	執って
p8 コラム本文 21～22行	除せられ	叙せられ
奥付	http://www.kagoshima-u.ac.jp	http://www.lib.kagoshima-u.ac.jp